

〔倭訓栞前編六〕かげろひ かぎろひと見ゆ陽燄をいふ影る日の義也野馬も遊絲も同じ萬葉集に炎字をもよめり火影也かげろひてとはたらかしてもいへり古事記にかぎろひのもゆる家むらとよみたまふは人家の火炎をいふ也萬葉集にかげろひのもゆる荒野といへるは荒野によれば葬火也

かげろふ 中比よりかげろひを轉じたる詞也かげろふのもゆる春日などいふは楞伽經にいへる春時燄也雲にかげろふなどいふは陰する意也ろふ反るかけると同じ古事記の歌に夕日のひかげる宮と見えたり祝詞には夕日の日隱處とあり菅家萬葉集に遊絲をよめりかげろふのそれかあらぬかとよめる是也詩にも天外遊絲或有無と見えたりかげろふのあるかなきかなどいふは蜻蛉をいふ倭名鈔日本紀に見ゆ童蒙抄に黒きとうばうのちひさきやうなる物といへり今も蜻蛉の一種極めて細小なる物をいへり本草にも蜻蛉言其狀伶仃也とみえたり水邊の木陰にすみてその飛貌の欸々と水に點じ閃々と電のごとくなれば陽炎に比していへるなり萬葉集に蜻火とも玉蜻とも書てかげろひとよめる也かげろひの磐垣淵とつづけたるも此義なるべし玉蜻は蜻蛉が目を土に埋おけば青珠となるよし博物志に見えたりとぞ又燈火の一名蜻蛉眼といへる事家瑞記に見えたり蜉蝣をいふは蜻蛉より轉じたる也

〔倭訓栞前編三〕いとゆふ 遊絲をいふは春の頃長閑き空に亂れて糸の如くちら／＼と見えわたるものをいふ又あそぶ草ともよめり野馬も同じ

〔圓珠庵雜記〕かげろふに三つあり野馬と蜻蛉と今ひとつはゆふぐれに命かけたるなどよめるやう蜉蝣にやと覺しされどそれをば和名にもひをむしとのみいへり萬葉にかげろふの夕とつづけたるは蜻蛉なるをよくも見ずしてかげろふといふ名のはかなく聞ゆればひをむしの別名かなど思ひたがへてよみなしけるにや